

# 日風園

高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ

第59号 2007年3月20日



果物カゴ (小松春重氏作)



はじめに竹を4つに割る



ナタでヒゴを作る

## 資料見聞 果物カゴ

香美市物部町小峰出身の小松春重さんの作った果物カゴです。

「木六月竹九月」と言って、竹を伐る時期には伝えがありました。その時期に伐れば虫が入らないというのです。マダケは小峰には無かったし、マダケはねばりが無くカゴには良くなかったので、ハチクを使ったそうです。

まず硬いカシの木の十字型のものを使って四つに割り、それをさらに二分の一、二分の一にして最後にヒゴ抜きを通して太さ何ミリといった細いヒゴにします。

小松さんの腕がヒユウツと動くと、シルシルシルと細いヒゴが生まれ出てきます。簡単なように見えますが、ここが一番難しく大変なところなのです。

そのヒゴを縦横にいてねいに編んでいくことでこの繊細なカゴが出来上がります。

小松さんはお父さんからこの技術を習いましたが、仕事にしていたということではなく、以前は山に暮らす人は上手下手はあっても、たいていカゴは編めたのだそうです。

小松さんの作るカゴは大変緻密で、竹細工の美しさがにじみでています。

(梅野)

# 「竹リバンブリー・スタイル」

高知 タケとひとのくらし」展のご案内

平成19年4月21日(土)～6月10日(日)

高知市から北の山を見ると、竹林がかなりを占めています。

五年前に高知・竹林問題研究会・21世紀ふるさとクラブが行なった『高知県春野町における竹林拡大の実態調査報告書』によると、調査地点で一九七五年に一〇%だった竹林が一九九六年には二〇%に拡大しているそうです。

おそらく高知市をはじめ、平野に近い山の竹林も似たようなペースで広がっているでしょう。増えた竹林は手入れされることもなく、様々な問題を生んでいます。

学芸員の中村・梅野、そして坂本正夫前館長は、県民の方といっしょに「とさ民俗文化研究会」に参加し、トヨタ財団の助成を受けて平成十六年から竹の調査を始めました。

私たちは、まず過去の人間の生活と竹との関わりはどうだったかということから学ぼうと、民具を収蔵している資料館や施設を訪ねることにしました。と言っても、高知県全域では広すぎるので、山村から海岸までの違いを見

ることができ、しかも流路がそれほど長大ではない物部川流域をモデルに選んで、調べてみました。すると、どの資料館にもたくさん竹製の民具があったのです。

竹のある暮らし

洗った食器を入れるメゴやソウケ、砂利などを運ぶ丈夫なバイリヨウというカゴ、牛の肥を運ぶメゴ、野菜を洗うためのユギカゴ、作物を乾燥させる円形のサツマ、カイコの餌の桑の葉を入れるクワカゴ、魚を捕まえる罾のモジやウエ、捕まえた魚を入れておくビク…等々。以上は主に竹だけでできた道具ですが、その他にも、釣り竿やホウキの柄、桶のタガなど素材の一部に竹を使ったものもたくさんありました。次に、実際に道具を使ったことのあるお年寄りに話を聞きに行きました。そこでは、物干し竿、稲を干す竿、生活用水を通す管など、竹が暮らしのありとあらゆる所に使われていたという話を聞くことができました。かつて



香美市物部町岡ノ内での竹製民具調査。一軒の家にあるさまざまな竹製民具

は竹の無い生活など考えられなかったのです。竹のある昔の生活様式は今回の展示のために考えたバンブー・スタイル と言うタイトル通りの暮らしだったのです。

まっすぐで長くて丈夫でしなやか、割ってヒゴにすれば編んで軽くて丈夫な容器、カゴやザルを作ることが可能な水にも強く、水切りにも適している竹の性格がいろいろな道具を作るのに適していました。

また、竹の良い所は、人家の近くに生えているということでしょう。切る時期こそ限られています、必要な時に簡単に手に入る竹は大変便利な素材だったのです。

展示では、まず竹を使った伝統的な道具のさまざまを紹介し、生活の中で

竹がいかにいろいろな所で使われてきたかを紹介します。

五月一九日の講演会では植物学の黒岩和男先生、民俗学の坂本正夫先生お二人のお話から、植物としての竹の種類や特徴と、それを使う高知県の民俗についてお話しして頂きます。

竹ばかりでなく、私たち人間は身近な自然素材をうまく使って暮らしてきました。六月二日の講座では、人間と植物の関わりについて、四国民俗学会・四国民具研究会のメンバーがさまざまな角度からアプローチします。

失われゆく職人の技

竹細工を見ると、編み目の美しさに引かれます。これらの道具は土地の器用な人や専門の職人によって生み

出されてきました。上手い人の作った製品は、アートと言ってもおかしくないような素晴らしさです。

今回の調査で、職人の方の仕事を見学させて頂き、その技術に舌を巻きま

した。  
展示では、カゴの製造過程の資料やビデオでその技術の一端を紹介する予

### さまざま 竹の民具



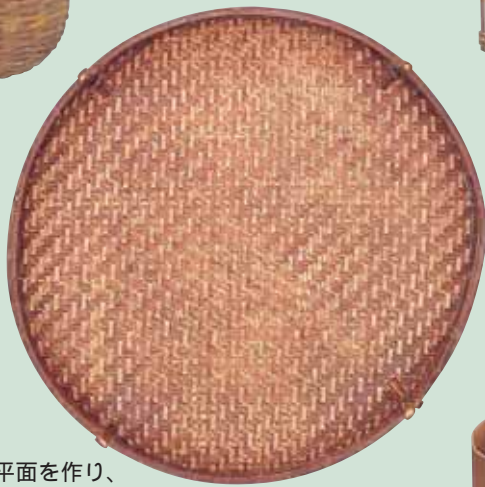
カニカゴ  
左の口から入ったカニを逃さない。  
竹で編んだ籠に、漏斗形の入口を付ける。



イナゴ籠  
竹ヒゴを編んで容器を作る。  
家畜の餌にする虫を入れる。



コバン  
鳥籠。ヒゴを組み合わせて作る。



サツマ  
竹を編んで平面を作り、  
その上で収穫物などを乾燥させる。



ヒシャク  
節を利用して水を溜める部分にし、割った竹を柄にする。

定です。

ですが、できればナマの職人の技を来館された方にも見ていただきたいと私たちは思いました。そこで、特別に職人の方をお招きすることにしていきます（5月4日・6月3日）。ぜひお見逃さないように。

また、実際にカゴ作りを体験したい

という方のために、一日でカゴを作る講座も行ないます（5月13日）。材料作りから挑戦する本格的なものになる予定です。

竹細工職人の技術も需要が少なくなってきた今、次の世代に伝えられることなく消え去るうとしていきます。今回の展示をきっかけに竹細工をやってみようという人が出てきたらこれほど嬉しいことはありません。

物部川をさかのぼってひとつの川の downstream から上流までの竹の植生を調べようと、黒岩和男先生といっしょに物部川をさかのぼりました。

海岸や河口付近では少なかったのですが、少し川をさかのぼると竹の群落はいたる所になりました。ところが、旧物部村の役場があった大栃を過ぎ、県境に近づくとつれて、山深くなると竹林が減ってきました。人の住んでいない辺りではまったく竹がありません。ただし人家の近くには、まとまった竹林が見られます。このことから私たちは、

人の住む所に竹があるのだと気づきました。

竹は地下茎からタケノコを出して増えますが、花は滅多に咲かないので種では遠くへ広がりにくいという性格をもっています。ですから、竹を離れた地で育てるには人間が株を移植しなければなりません。

そう考えると、竹林の多くはもともと人間が作った人為的な自然だったのではないのでしょうか。人間の生活領域が広がるとともに、有用植物である竹を持ち運び、竹もその範囲を広げていったのでしょうか。

竹の需要が減って

このように人間と密接な関係にあった竹ですが、金属やプラスチックなど新しい素材が工場で大量に生産され、安く買えるようになると、竹は急速に使われなくなりました。

タケノコの需要が減ったことも大きいようです。おいしいタケノコが出来る孟宗竹は、江戸時代に日本へもたらされ各地に広がったものだと言われていますが、外国産のタケノコが入ってくると、国内のタケノコの需要が減り、竹林の放置に拍車をかけていきました。こうして、伐採や加工に大きな手間と労賃がかかる近くの竹林は、わずかなタケノコを取る以外には無用の長物



人家の近くにある竹林。竹は人間と長く深いつながりがあった  
(香美市香北町谷相)

不幸ではないでしょうか。

新しい試み

私たちは、竹との関係を責任もって見直さなければならぬのです。

展示では、竹との関係を改善するための試みのいくつかを紹介いたします。

テレビでも紹介されていますが、高知県春野町は拡大する竹林問題を解決するために、竹の床材を作る事業に挑戦しました。新しくできた高知医療センターの床は竹で出来ています。

この事業は、竹材を伐採する手間賃がかりすぎて残念ながら休止しているのですが、今度は、竹材とあわせて、竹のバイオマス利用に挑戦しています。

地域の資源を利用して地域を良くしていきたい、という担当の中曾根さんの情熱に私たちは打たれました。

香美市香北町の中川康之亮さんも別の意味で竹にとりつかれた一人です。高知市の日曜市で竹のおもちゃを販売する中川さんの願いは、多くの人に竹に親しんでもらって、生きている竹の技術を伝えたいというものです。

企画展がオープンする四月二十一日には、中川さんの指導で高知工科大学



山崎大造さんの作品 (撮影 山本芳子)

の学生さんが中心に竹のドームをアトリウムに作ります。このドームは期間中置かれて、企画展のシンボルとなります。ドーム作りをいっしょに手伝って頂ける方も募集しています。中川さんの竹のおもちゃは、二階ロビーで自由に遊べるようにしたいと考えています。

とさ民俗文化研究会のメンバーでもある山崎大造さんは、竹細工を作る若い職人さんですが、竹を使った光のアート作品を作る作家でもあります。竹の中からたくさんさんの穴を通して漏れる優しい光が私たちの心を照らします。

展示では、このような新しい試み、新しいバンブー・スタイル についても紹介していきます。竹を未来の私

たちの暮らしの中で活かすために。

竹に親しもう

多くの人に竹に親しんでもらおうと、親子や家族で楽しめる催しを企画しました。

五月三日の歴民の日(入場無料)には、市原麟一郎さんの「土佐民話の家」を民家で行ないます。

中が空洞で、空気を吹き込むと音が出る竹は笛の材料に適しています。また叩くと音が響きます。

五月三日には、ケーナ奏者・大目真吉さんとロス・トマテスによる竹でできたケーナを使った楽しい演奏会、五月五日には世界の珍しい竹の楽器の音を聞ける「世界の竹の楽器図鑑」を、楽器博士・北村剛さんのお話と演奏で行ないます。

子どもたちには、五月四日の「竹の笛(うぐいす笛)を作ろう」、五月五日の「竹トンボを作るつ」がお勧めです。四日と五日は物作り体験です。お父さんお母さんもおいっしょに手伝ってください。四日は、出来た笛で演奏してみます。五日は、講師の昆虫職人・尾崎直広さんが参加者へおみやげを準備してください。

期間中、さまざまな催しでみなさまをお待ちしています。竹に親しんで、身近な自然を見直して頂ければ幸いです。

になつてしまったのです。

県内に限らず各地で目にする竹林は、竹がびっしり生えて足も踏み込めなかつたり、倒れた竹が何本もそのまま放置されている所がよくあります。手をかける商品価値が無かつたり、労力の余裕が無いため、竹林はほったらかしとくしかない、という状態なのです。放っておいてもぐんぐん育つという竹の特徴が悪い方に働き、竹は周りの里山を覆いつくそうとしています。

あれほど人の役に立ってきた竹なのに、人が自分たちのために植えた竹なのに、これではあまりに両者にとって

重要寄託資料

香宗我部・片岡家資料が寄贈されました！

歴史館には数多くの重要資料が収蔵されていますが、寄託という形でのお預かり資料がかなりの割合を占めています。

長宗我部元親の実弟香宗我部親泰所用と伝える、甲冑・陣羽織・槍・采配は、平成六年度の「四国の戦国群像」

展で初公開され、大反響を呼びました。その後、現存する唯一の長宗我部一族の遺品（武器・武具）としてご子孫一良氏より寄託されましたが、この度寄贈していただくことになりました。

一方、高岡郡の有力郷士、片岡家伝来の家資料は、土佐藩下級武士層の教養等が垣間見える一括文書数百点が中心となります。他にも、土佐勤王党员



「お役に立てば光栄です」とにこやかに微笑む片岡登美子さん



「個人で管理していくのは大変なのでホッとしました」と語る香宗我部一良さん

片岡左太郎所用の甲冑や、一族の女性が身に付けた打掛などの貴重な資料を含みます。

これらの資料群は、故片岡正一郎氏によって、昭和五三・五九年に寄託されていましたが、奥様登美子氏のご英断により寄贈へと切り替わりました。今回のお二人のご厚志にお応えるため、高知県知事名の感謝状が当館館長より贈呈されました。

今後とも適正に管理し、機会あるごとに展示をしていきたいと思っております。

(野本)

消えたか？「子ども文化」

館長宅問一之

夏休みも終わり近い頃、本館のワクワクワークで「水鉄砲を作ろう」の行事があった。館の教育普及の一環で「ものづくり」「やってみる」といった体験メニュー。今年も多くの親子が集まってくれた。

材料も道具も準備され、参加者は指導者の教えに従いそれを使って作り、水をとばして「とんだ」で終わる。山を駆けて材料を選ぶこともなく、どの節を残しどう切ればより合理的か、押し棒の切り方も、綿布の巻き方もすべて教えるの通りすすめば水鉄砲ができる。いま「子ども文化」が失われたとよく言われる。児童出版物に児童映画、児童劇、テレビ、ラジオの児童番組など、大人が授ける「児童文化」は氾濫する。しかし子ども達が継承してきた遊び道具、それを手作りする方法や技術の伝え手を少なくし、手作りの方法も次第に忘れられてきた。さまざまな年齢の子、近隣の遊び集団の交流、多くの年長の子の作るものを見て後輩は真似する。時には手をとって教えてもらう。こんな光景は見かけない。



水鉄砲作り (平成18年 8月26日)

交通事情や犯罪の危険で、子ども達の遊び場は制限され、家庭教育の要求増大は遊びの時間をこまぎれにし、仲間集団も変質させた。小刀携帯禁止の刀狩令も「子ども文化」喪失の一因だろ。

「肥後の守」はいつもポケットにあり、山を走り、多くの友と、モノ作りに日暮れも忘れた頃が思い出された一日であった。

考古

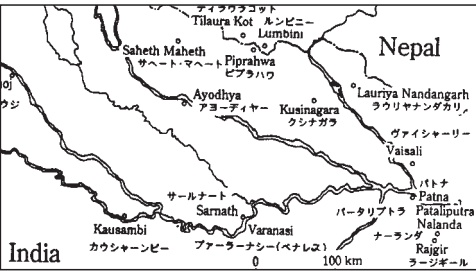
仏跡巡礼

・ 釈迦族の故城カピラ城跡

釈尊が出家する以前、王として青年時代を過ごした故城は何処にあったのでしょうか。

釈尊が生まれた都は、カピラヴァストゥ (*Kapilavastu*) と呼ばれ、漢訳名は迦毘羅衛・劫比羅伐窣堵などと書きます。カピラヴァストゥは、現在のネパール・インド国境付近にあったとされていますが、その比定地については、論争が続いています。その候補地の一つとして、ネパールのティラウラコットがあげられています。この遺跡は、日本・インド・ネパールのピブラワー・ガンワリアが比定地としてあげられています。さて、かつてこのカピラ城を訪れていた有名な僧がいました。五世紀には法顕、七世紀には玄奘がこの地を訪れています。玄奘の『大唐西域記』によれば、玄奘がみたのは荒廃した城壁で

学芸員の机から



タイ地方の仏跡

した。釈尊の父淨飯王や摩耶夫人の正殿や寢床には精舎が建ち、像があったと書かれています。また、釈尊の出家の動機の一つとなった四門に老人病人、死者、沙門の像もあつたとされています。なお、釈尊の晩年、劫比羅伐窣堵国は、舎衛国に滅ぼされてしまいました。

(岡本)

歴史

史跡めぐりの見学地より

・ 讃岐にもある土佐神社

「長宗我部盛親展」の関連企画として、昨年実施した史跡めぐりでは、県内外の長宗我部氏関連史跡を訪ねました。

幾つか訪問した見学地のなかで、最も参加者の反応が大きかったのが、香川県高瀬町上勝間にある日枝神社(山王さん)でした。なぜならこの神社内に、土佐神社が鎮座しているからです。

日枝神社の由緒沿革には、「天正六年(一五七八)、長宗我部元親の讃岐本篠城攻めにより同城が落城。新城主として重臣中内藤左衛門が入城した。この時藤左衛門は、元親の命により、土佐一宮の分霊をこの地に奉斎した(一部要約)」と記されています。

江戸時代の記録によれば、元親の軍勢が去った後も、この地で土佐神社は祀られ続けました。そして、元々古くからあつた「山王大権現(日枝神社)の社」と「土佐神社」の

社は並立するようになり、隣に鎮座していた日枝神社に合祀(相殿)され今日に至ります。

数百年間讃岐で祀られてきた土佐神社。歴史の浪漫を感じます。

(野本)



日枝神社の神紋。何がモチーフになっているか分かりますか？

※左:日枝神社の「日」の神紋、右:土佐神社の「土」の神紋

民俗

田辺寿男写真目録作成中

民俗部門では、昨年寄贈された民俗写真家・田辺寿男さんの写真資料を整理して目録を作成中です。

目録作りは、企画展や普及事業と違って表に出ない地味な仕事ですが、博物館にとっては大事な仕事のひとつです。博物館の収蔵資料は、厳重に保管し未来へ伝えることが第一ですが、県民をはじめ多くの方が何らかの形で利用することも目的としています。目録が無いと何がわからないので、利用したいと思ってもどうしようもありません。

そこで、数人で手分けしてフィルムに何が写っているか、何コマあるかを確認し、目録を作っています。幸い、田辺さんのフィルムには、いつ、何を写したかのメモがありますので、それを元に見出しや日付を記録します。しかし、中には、フィルムの順番が入れ替わっているものや、地名がわからないものもあります。しかも田辺さんの写真資料は全部で五万点もあり、作業には多くの人手と時間がかかります。目録の一冊目はこの春に刊行予定ですが、全部出すにはしばらくかかりそうです。



「大根を干す」南国市浜改田 田辺寿男氏撮影

ですが、目録が出来れば、高知の昭和三〇年代から平成にかけての民俗の写真記録という宝物が、私たちに利用しやすい形になるのです。

(中村)

一万人が  
見た!!

# 伊能大図

## フロア展 in くるしおアリーナ

3月1日～4日まで高知市五台山の東部総合運動場くるしおアリーナで行われた「伊能大図フロア展inくるしおアリーナ」は11,735人の来場者で幕を下ろしました。

老若男女問わず様々な方がご来場くださり、フロア面に敷き詰められた地図の上を興味深そうに歩いていました。

アリーナ2階では、歩測体験や地図クイズも行われ、正解者に配られた地図パズルを嬉しそうに手に持ち会場に現れた子ども達もいました。



開館15周年を記念して行われた今回の展示には、一般のボランティアを始め各関係機関など多数の方にご協力いただきました。ありがとうございました。

これからも、高知の歴史・文化を守り伝えていくべく力を尽くしてまいりたいと思います。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。(猪野)



でんうまやあくるわ  
城跡で最も急な伝馬跡曲輪への階段

## 岡豊山の さんぽ道

### 新刊等のご案内

#### 「長宗我部盛親

—土佐武士の名誉と意地—



開館15周年関連企画展

「長宗我部盛親 - 土佐武士の  
名誉と意地 -」の企画展図録  
です。大好評につき、増刷致  
しました。

定価 850円

送料 290円

口座番号 01610 - 2 - 38806

加入者名 高知県立歴史民俗資料館

### 年間 行事

#### 「高知の食文化を味わう ～食のこころ～」

毎月第3土曜日開催!!要予約。先着順。毎月10  
日より次月開催分の予約受付。

県内各地に伝わる郷土料理と、その地方の文化  
講座をセットにした催しです。(実費要)

開催日は変更になる事があります。

#### 臨時休館のお知らせ

展示替えのため4月19日～20日、

6月11日～12日

資料燻蒸のため6月18日～6月25日  
は休館いたします。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第59号  
平成一九年三月二〇日  
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館  
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1  
TEL 088(862)2211  
FAX 088(862)2110  
開館時間 午前9時～午後5時  
休館日 年末年始12月27日～1月1日  
臨時休館あり  
入館料 通常期「常設展」大人(18才以上)  
450円・団体(20人以上)360円  
無料: 高校生以下、高知県及び高知市長  
寿手帳所持者、療育手帳・身体障害  
者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳  
被爆者健康手帳所持者とその介  
護者(一名)

印刷・川北印刷株式会社

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/> rekimin/  
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成19年4月～平成19年6月の催し物

### 企画展

#### 「竹—バンブー・スタイル—」

高知 タケとひとのくらし

平成19年4月21日(土)～6月10日(日)



里山に拡大し社会問題になっている  
竹ですが、ほんのこの間までは、生活  
になくはならない植物でした。この  
展示では、かつて暮らしの中で使われ  
てきた竹製の民具と、それらを生み出  
してきた職人技を紹介するとともに新  
しい竹の利用法も展示いたします。

### イベント

4月21日(土) 10:00～ 「竹ドームを作ろう!」

中川康之亮氏+高知工科大学ロマンチックプロジェクト

5月3日(木・祝) 13:00～、15:00～ (約30分)

「竹笛・ケーナの音楽会」 大目真彦氏+ロス・トマテス

5月5日(土・祝) 13:00～14:00

「世界の竹の楽器図鑑」 北村剛氏

### 企画展講演会

要予約、はがきかEメールで。入館券が必要です。先着100名

5月19日(土) 13:30～16:00

「植物としての竹・暮らしのなかの竹」

黒岩和男氏・坂本正夫氏

### 特別講座

要予約、はがきかEメールで。入館券が必要です。先着80名

6月2日(土) 13:00～16:00 「竹と木の民俗」

共催: 四国民俗学会・四国民具研究会・日本民具学会

### 実演

5月4日(金・祝)・6月3日(日) 10:00～15:30

「竹細工実演」 西村長次郎氏・西村宏子氏

### ワクワクワーク

電話かEメールで申し込みください。先着順

5月3日(木・祝) 10:00～14:00

「竹と土の壁を作ろう」

5月3日(木・祝) 14:00～14:50

「土佐民話の家 竹と木の話」

市原麟一郎氏

5月4日(金・祝) 13:30～16:30

「竹の笛(うぐいす笛)を作ろう」

大目真彦氏

5月5日(土・祝) 14:00～16:00

「竹トンボを作ろう」

尾崎直広氏

5月13日(日) 9:30～16:30

「一日でカゴを作る」

山崎大造氏

### 展示室トーク

担当学芸員による展示解説です。申込み不要。入館券が必要です。

4月22日(日)・28日(土)・5月26日(土)

6月9日(土)・10日(日) 14:00～15:00

5月3日(木・祝)は **歴民の日** (入館無料)

### テーマ展

3階総合展示室

#### 「板垣退助—新収蔵資料大公開—」

4月27日(金)～5月16日(水)

最近当館に収蔵された新史料や、これまで十分にご紹介するこ  
とが出来なかった自由民権運動の指導者板垣退助の遺品を公開い  
たします。